

## つくしだよりから

### 涙が教えてくれたこと

とりかえしのつかないことが起ると、何がいけなかつたんだとあれこれ悩み、自分をせめる。でも、そんな「負のスパイラル」から私たちをすくってくくれるものがある。

ある朝、大きな箱が事務室玄関においてあった。気に留めぬまま昼前ようやくのぞくと、中に一羽のツバメ。はねを広げ、ばたつかせている。成鳥らしい。きつとどこかにぶつかり落ちたのだろう。門扉前でうずくまるのを登園する子がみつけ、職員に知らせてくれた。とりあえず箱に新聞をちぎって横たえたという。「京都市動物園なら何かできるかも」との言葉を頼りに電話してみる。

「野生生物保護センターで、預かりますよ」

鳥はまだ胸で大きく息をしている。間に合うだろうか。後部座席の床に箱をおき、エンジンをかける。渋滞。おそい信号。じりじりと約四〇分。急いでいたので搬入車入口から業者トラックに続いて入ろうとして職員に止められた。事情を説明すると分かってくれた。車から箱を

取り出し中をのぞく。が…

出発前、動いていた胸がとまっている。広げていた羽は両方とも閉じられている。若い職員は何も言わず箱を受け取り、走って中へ。素手で鳥を抱き、机の上で羽を広げ、二本の指で胸を押す。何度も。人間と同じ救命マッサージ。だが、鳥は動かない。私は脳裏で「なぜもつと早く気づかなかつたんだ」「帰って子どもたちになんて言おう」。後悔や言い訳ばかりがうかぶ。その間も胸を押し続ける彼。諦めて私は「もうだめですよね」。そのときはじめて彼は指をとめた。再び鳥を抱き「残念ですが…」。言葉をつまらせ、うつむき、涙を流した。びつくりした、彼の涙に。そして、心が熱くなった。「言い訳」よりも大切なものに、その涙は気づかせてくれた。何<sup>キ</sup>も離れたこの場所で、小さなたつた一羽のために泣いてくれる人がいる。彼の涙はきくと、園で待つ子どもたちの心ともつながっているにちがいない。そのとき思い出した聖書の言葉がある。

「泣く人と共に泣きなさい」。(ローマ十二・一五)。